殿敷侃　略年譜

本年譜は、『殿敷侃　遺されたメッセージ・アートから社会へ』（1993年、下関市立美術館）および『殿敷侃：逆流の生まれるところ』（2017年、広島市現代美術館）を主に参照し、適宜抜粋・加筆し、作成した。

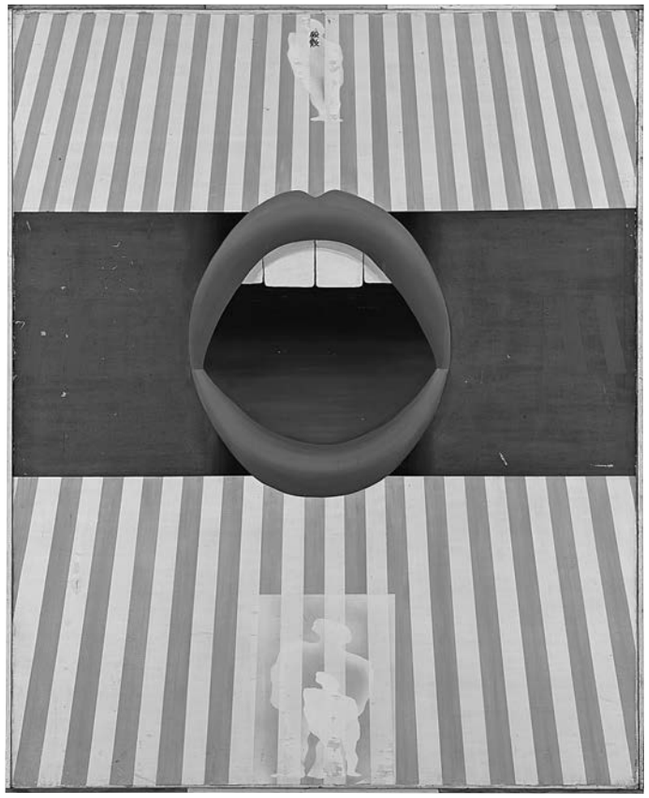
1942	1月22日広島市に生まれる。
1945	原爆投下から数日後、爆心地にあった広島郵便局に勤めていた父を捜索するため現地に入った母親の背中で二次被爆。
1960	広島県立世羅高校卒業後、国鉄に勤める。
1962	肝臓病のため広島鉄道病院に長期入院。入院中に病院内の絵画教室に参加し、絵を描き始める。翌年退院し、職場復帰。
1964	この頃から「広島職場美術展」、「国鉄美術展」、「広島市平和美術展」、グループ「目」などに出品を開始。
1966	「第30回新制作展」で入選。第32〜35回展でも入選。
1969	「新制作協会所属　殿敷侃個展」（ギャラリーヨコタ、広島市）
1970	東京近郊への転勤希望がかない上京。神奈川県川崎市内に住み、川崎駅に勤務。『朝日ジャーナル』（12月6日号）表紙に作品《は2》が掲載される。
1972	国鉄を退職し、山口県長門市に移る。「第3回広島青年アンデパンダン展」（広島県立美術館）にダンボールを使ったインスタレーションを出品。「殿敷侃　遺作展（第一回不滅の虐殺死）」（画廊梟、広島市）、自宅にて絵画教室「銀の星」「殿敷美術研究所」を開く。
1973	この年から長門市内の材木店のコンクリート塀を使った壁画シリーズを開始し、殿敷美術研究所の教え子らと制作。年に1回程度描きかえ、1990年頃まで継続。
1974	インド、ネパール、セイロン（現・スリランカ）などを旅行か。
1975	山口県立萩工業高等学校（現・萩商工高等学校）で教える。
1977	銀座の画廊で久保貞次郎を知り、銅版画制作を開始。
1978	「殿敷侃銅版画展」（萩焼ぎゃらりい彩陶庵、山口県萩市／希望的喫茶おじゃま虫、長門市）、「殿敷侃個展」（飯田画廊別館、東京）
1979	「第22回安井賞展」（西武美術館、東京）で入選。
1980	この頃広島スクリーン印刷の斉藤伸三と出会いシルクスクリーン版画の制作を開始。「第23回安井賞展」（西武美術館、東京）で入選、「第2回北九州ビエンナーレ」（北九州市立美術館）で入選。
1981	「EVENT原子爆弾」（6/10平和公園、広島市）。「第1回西部美術館版画大賞展」（西武美術館アートフォーラム、東京）で第2席買い上げ賞受賞。
1982	ヨーロッパ、アメリカを旅行。ドクメンタ7（カッセル、ドイツ）でヨーゼフ・ボイスの作品に衝撃を受ける。
1983	インスタレーション作品を展開。「殿敷侃展　新作・黒のEVENT」（ビジャブランカ、山口県小郡市）。第37回山口県美術展覧会（山口県立美術館）に出品、優秀賞受賞。
1984	「明日への造形ー九州　第4回展〈版〉画の探求」（福岡市美術館）に出品。「第38回山口県美術展覧会」（山口県立美術館）で佳作賞受賞。
1985	「九州の版画展　その用と美ー中世から現代まで」（福岡市美術館）に出品。「第39回山口県美術展覧会」（山口県立美術館）で優秀賞受賞。「第2回アジア美術展」（福岡市美術館）に出品。
1987	「アート・ドキュメント'87　インスタレーション＋ビデオ・アート＋パフォーミング・アート」（栃木県立美術館）で優秀賞受賞。「ゴミ拾いをアートにするイベント」（二位ノ浜、山口県長門市）。ヨーロッパ旅行（6/7-28）をし、ドクメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクト、バーゼルアートフェアなど訪れる。「殿敷侃が赤くぬられてーヒロシマーがみえた。」（平和公園、広島市）
1988	「'88環境アート・プロジェクト」（錦帯橋周辺、山口県岩国市）に出品し、アートディレクターも務める。「ドリームフェンスプロジェクト」説明会（島根県益田市）
1989	長門市内で「タイヤの生る木ーTYRE　BEARING TREE PROJECT」を開始。「殿敷侃展　まっ赤に塗られてハカタが視えた」（ギャラリーロワ、福岡市）、「BARRICADE-TELEVISION-YAMAGUCHI殿敷侃展」（ギャラリー・ナカノ、山口市）
1990	「EIGHT INDIVIDUALS FROM EAST SEOUL-TOKYO-NEW YORK ART PROJECT」（佐賀町エキジビットスペース、東京）に出品。作品集『逆流する現実 Reversing Reality』刊行。ヨーロッパ旅行（6/1-7/1、10/21-11/6）、「殿敷侃展 BARRICADE-TYRE」（福岡市美術館特別展示室B）
1991	『タイヤのなる木 TYRE BEARING TREE PROJECT』刊行。「MITO ANNUAL '91 美術とメッセージ」（水戸芸術館現代美術ギャラリー）に出品。「〈物体〉詩ー思考するオブジェからGOMI・ARTへ」（板橋区立美術館）に出品。「第14回現代日本彫刻展ー〈宇部讃歌〉」で入選。
1992	2月、島根県益田市の益田赤十字病院にて肝臓癌のため逝去。

殿敷侃

TONOSHIKI Tadashi

会期　2020年6月30日 |火| −8月30日 |日|

会場　近現代美術室B



殿敷侃《は1》1970年

殿敷侃（とのしき・ただし、1942-1992）は、30年の美術活動において、油彩画、版画、インスタレーション、屋外でのアートプロジェクトと、ダイナミックな展開をみせた美術家です。その制作には、自身の被爆体験を端緒とする人間の生そして社会へのまなざしが通底し、凄まじい熱量をもって、作品という形に結実していました。

2018年度、福岡市美術館は殿敷侃の作品18点をご遺族より寄贈いただきました。本展ではそのすべてを展示紹介し、福岡で展示されたインスタレーションに関する写真資料等を加え、殿敷侃の活動を振り返ります。

［学芸員　正路佐知子］

福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810−0051
福岡市中央区大濠公園1−6
TEL　092−714−6051（代表）
FAX　092−714−6071
www.fukuoka-art-museum.jp

作品リスト

※記載は、題名（日・英）、制作年、技法または材質（日・英）、寸法（縦×横cm）、当館分類番号。
※すべて2018年度天野紋子氏寄贈。

声にならない声を表す

1942年広島に生まれた殿敷侃は、父を原爆で、母を二次被爆で失い、8歳で原爆孤児となりました。高校卒業後に国鉄に勤務した殿敷は20歳の時、被爆が原因と思われる肝臓の病のため長期療養を余儀なくされます。入院していた病院内で催されていた絵画教室への参加が、美術との出会いになりました。翌年退院した殿敷は絵画制作に励み、1964年からいくつもの展覧会に出品し、1966年には新制作展で初入選を果たします。1970年、《は2》（《は1》の対作品）が週刊誌『朝日ジャーナル』の表紙を飾りますが、作者のコメントからは広島の被爆者の声にならない声が作品に表されていることが読み取れます。殿敷は美術活動に専念するため1972年に国鉄を退職。山口に活動の拠点を移し、絵画教室を開きながら制作に力を注ぎます。

1　自画像のある風景

Landscape with a Self-portrait
1969年
アクリル・画布
acrylic on canvas
51.2×39.0
1-A-684

2　は1

Teeth 1
1970年
油彩・画布
oil on canvas
162.0x130.4
1-A-685

無数の声を可視化する

1970年代より、殿敷は点描による細密なペン画に着手します。点描は油彩画にも応用され、両親の遺品などが描かれるようになりました。1980年に入ると殿敷はシルクスクリーンによる制作を開始し、ペン先で引っ掻いたような形を無数に画面に反復・増殖させる「霊地」シリーズに着手します。この形状は、1978年の油彩画《釋寛量信士（父のつめ）》に描かれた「爪」をもとにしていました。「霊地」シリーズは原爆と殿敷のかかわりを暗示するだけでなく、父をはじめ原爆で命を落とした名もなき人々の存在や声が無数に蓄積する爪形に仮託され、唸りをあげて空気を震わせているかのようにも見えます。

3　題不詳

Unknown
1980-1981年頃
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
56.2×44.9
1-E-1046

4　霊地

Landscape of a Life Deceased
1980-81年頃
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
25.3×34.4
1-E-1034

5　霊地（1）

Landscape of a Life Deceased (1)
1980年
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
57.5×81.5
1-E-1033

6　霊地

Landscape of a Life Deceased
1980-81年頃
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
57.4×41.9
1-E-1035

7　霊地

Landscape of a Life Deceased
1980-81年頃
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
38.0×54.1
1-E-1036

8　霊地

Landscape of a Life Deceased
1980-81年頃
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
34.0×103.6
1-E-1037

過去と現在を重ねる

間もなく「霊地」シリーズは、印刷物の上に刷られるようになります。父そして原爆の記憶と切り離すことのできない「霊地」を、同時代の消費社会の動きを伝える新聞や広告ポスターと重ねること。それは過去の出来事を現在に引き寄せることであり、原爆をめぐる状況にとどまらず、現代社会においても脇に追いやられてきた存在について、見る者に意識させる試みであったといえるかもしれません。

9　作品（2）

Work (2)
1981年
シルクスクリーン・印刷物
silkscreen on printed material
101.5×145.8
1-E-1038

10　作品（3）

Work (3)
1981年
シルクスクリーン・印刷物
silkscreen on printed material
102×146.2
1-E-1039

11　作品（4）

Work (4)
1981年
シルクスクリーン・印刷物
silkscreen on printed material
101.5×145.2
1-E-1040

12　作品（5）

Work (5)
1981年
シルクスクリーン・印刷物
silkscreen on printed material
102.1×145.8
1-E-1041

13　作品（8）

Work (8)
1981年
シルクスクリーン・新聞紙
silkscreen on newspaper
216×160.2
1-E-1042

14　作品（9）

Work (9)
1981年
シルクスクリーン・新聞紙
silkscreen on newspaper
216.1×160.0
1-E-1043

15　新聞

Newspaper
1982年
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
54.4×40.4
1-E-1045

出来事のイメージを反復し拡張する

シルクスクリーン版画は、既存の印刷物へのレイヤー構造を可能にしただけでなく、写真原版の利用やイメージの拡大と反復を可能にしました。そこにはアンディ・ウォーホルの版画作品からの影響や刺激もあったといいます。原爆や水素爆弾の写真を用いたり、ケロイドを負った背中の写真を用いた作品は、様々な場所や壁や空間を覆うように展示、あるいは屋外空間に多数配置され、強いインパクトとメッセージを見る者に与えてゆきました。

16　HYDROGEN BOMB

HYDROGEN BOMB
1981年頃
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
70.4×99.8
1-E-1044

共に行い、思考を共有する

殿敷は1982年よりペンや鉛筆あるいはスタンプで画面を埋め尽くす作品に着手します。手による途方もない作業は紙から空間へと移行し、1983年にはギャラリーの白い壁を観客とともに鉛筆で黒く塗りつぶす「黒のイベント」も開催しました。また同じ頃から、大量の廃材（テレビやタイヤ、海岸で拾われたプラスチック類）を美術館やギャラリー、屋外空間に配置するインスタレーションも展開させます。1985年福岡市美術館で開催した「第2回アジア美術展」に出品された《お好み焼き風料理法》は、廃材を焼き固めた塊で構成されています。殿敷の作品は、時に参加者を巻き込むアートプロジェクトの形も取りました。意識下に追いやられた自然環境と人間の不均衡な関係を明るみに出し、打ち捨てられた人やモノあるいは意識へと向かう殿敷の思考は、多くの人々と共有されていきます。本展では、福岡で発表されたインスタレーションの展示風景写真も紹介します。

17　線の集積

Accumulation of Lines
1984年
鉛筆・紙
pencil on paper
102.2×71.8
1-D-449

18　題不詳

Unknown
1986年頃
ミクストメディア
mixed media
188.0×228.0x13.0
1-A-686

資　料

- 殿敷侃「表紙の言葉　は（2）」『朝日ジャーナル』1970年12月6日号（複写）
- 殿敷侃「伝統の構造　ヨーロッパで考えたこと（1）ーカッセルと市民意識と社会性ー」『山口県立美術館ニュース　天花』第15号、1983年3月31日
- 1984年『明日への造形ー九州　第4回展　〈版〉画の探求』カタログと原稿
- 1985年「第2回アジア美術展」（福岡市美術館）での《お好み焼き風料理法》展示記録写真
- 1987年『'87 Art Event GATHERING TRASH ゴミ拾いをアートにするイベント 山口ー日本海ー二位ノ浜』カタログ
- 1987年《まっ赤にぬられてヒロシマが視えた》記録写真他
- 1989年「殿敷侃展　まっ赤に塗られてハカタが視えた」（ギャラリーロワ、福岡市）のリーフレットと展示記録写真
- 1990年「殿敷侃展　BARRICADE-TYRE」（福岡市美術館特別展示室B）展示記録写真